

2018 年度 立命館附属校・提携校 薬物防止講演会 第 2 回養護教諭研修

附属校教育研究・研修センター

3 月 2 日(土) 朱雀キャンパスにおいて、附属校・提携校 薬物防止講演会及び第 2 回養護教諭研修を実施した。

講師として薬物依存症回復施設「大阪 DARC」ディレクター、薬物依存症回復支援「Freedom」代表の倉田 めば氏を迎え「薬物依存からの回復」～子どもが薬物を使うとき～をテーマに、倉田氏ご自身の実体験を中心としたご講演と、終了後に参加者との質疑応答を行った。その後養護教諭のみで各校の課題・実践、来年度の展望などの研究協議を行った。

参加者は 6 名（立命館中高 2 名、立命館宇治中高 1 名、立命館小 1 名、初芝橋本中高 1 名、平安女学院中高 1 名）であった。

《研修内容》

講師の倉田氏からは、ご自身が薬物を使い始めたきっかけ、その後の薬物乱用と自傷行為のため入退院を繰り返した後、依存症リハビリ施設と自助グループにつながり、回復への道を歩み始めたことを赤裸々に語っていただいた。そうした体験を通じて、現在では薬物依存症からの回復支援を多角的に展開する市民団体「Freedom」を中心に、当事者、家族、専門家が立場を超えたネットワークを組んで回復支援に取り組んでいるお話もご紹介いただいた。

実体験の一つとして、13 歳の時、些細なことから親の期待に沿えない自分を見つけ、不良への道を進むことを決意したことが、薬物を使い始めるきっかけになったというお話があった。その中には薬物が友達をつくるための触媒の話もあり、いつ、誰もが依存症になる可能性があることを如実に語るお話であった。また、全国の DARC でリハビリテーションプログラムを受けている薬物依存者が初めて薬物を使い始めた平均年齢が 14 歳ということも納得いく話であった。

人が依存症に陥るのは、しばしば見落とされている依存症へと突き動かす心理的苦悩の存在があり、単に快樂だけでなく、苦痛の軽減という報酬が要因にあるとの指摘があった。ご自身の薬物依存の理由の一つと



子どもが薬物を使うとき

倉田 めば
大阪ダルク ディレクター
Freedom 代表
精神保健福祉士

HELP 1

薬物を使い始める前
私には
助けが必要だったが
どうやって助けを求めたらいいのか
わからなかった

して、トランスジェンダーであることも語られた。そして薬物を使う人はなぜ助けを求められないのか？自己処方としての薬物使用など7つの観点からお話があり、薬物依存症が孤独の病であり、そこには複雑な心的要因のあることを理解する必要性を示されたと言える。

また、家族支援という視点でもどう取り組むべきかお話いただき、ご自身の回復への道のりでは、自助グループからのメッセージも幾つか紹介していただいた。

最後に予防教育の視点で、改めて「薬物乱用三つの落とし穴」として、以下の点に触れられた。

1. 自分は絶対使うわけがない
→いつ、だれでも使う可能性はある。
2. 合法的なものであれば問題ない
→違法、合法を問わず、健康を損ない、周囲を巻き込む
3. 薬物を使ってもすぐやめられる
→依存症になったらなかなかやめられない。

そして、講演終了時には倉田氏が一番言いたかったこと、「最悪のほめ言葉（薬物を使っているけど本当はいい子）ではなく、最高のけ

なし言葉（薬物を使うなんて本当に悪い子）を！命かけて悪い子になろうとしているのに、まだいい子なんて言われたら、もっと悪いことをしなければならぬ。」という言葉が再度繰り返され、ご自身の詩とともに講演を結ばれた。

講演後の参加者との懇談では、家庭環境により薬物との関わりが懸念される生徒への対応や、大麻に関して現在、WHOの報告もあり、医療用としての効用や、一部の国、地域では嗜好用としても合法化している動向なども踏まえ、古い情報を根拠としたままの日本の実情は議論の余地があり、スマホゲームへの依存などがむしろ問題ではないかとの認識を示された。

講演を通じて、薬物依存症について認識を新たにすることができ、今の複雑な社会に置かれている子ども達を少しでも理解し、寄り添うための大切な気づきを学ぶことのできた講演会であった。

（記録：一貫教育課 工藤祐一、編集：教育研究・研修センター 羽田澄）

HELP 2

薬物を使い始めたころ

私には
助けが必要だったが
助けを求める気はなかった

HELP 3

薬物が止まらなくなってしまい

私には
助けが必要だったが
誰に助けを求めればいいのか
わからなかった

HELP 4

薬物を本当にやめたいと願い始めた時

私には
助けが必要だったが
助けより
薬物が必要だった